

経済同友会インターンシップ推進協会

教育価値の高いオンライン実習の確立に向けて 「経済同友会インターンシップ」の 新展開



経済同友会インターンシップ推進協会は、コロナ禍により、対面でのインターンシップの実習が困難になったことを踏まえ、2020年10月に会員企業や大学の協力を得て「オンライン実習教育価値向上プロジェクト」を立ち上げた。今回、オンライン実習における教育価値向上の観点から幅広い議論・整理を行った成果を公表、今後の実践につなげていく意向である。

本プロジェクトのポイントの一つは、ウィズ／アフターコロナ時代にインターンシップの教育効果をより確かなものとするために、リアルとオンラインの併用による企業実習の望ましいあり方を考えるということである。もう一つはオンライン実習の教育価値向上の施策について論点整理を行い、その成果を全会員が共有し、実践することにある。それにより2021年度以降は全会員が実習に参加することを目指している。

検討チームは、今年度の実習について行った会員や学生へのアンケート調査を踏まえ、精力的に議論を展開した。アンケート結果によれば、オンライン実習実施企業10社中9社が「オンライン化はやむを得なかった」と回答、さらに、オンラインであっても学生の発表レベルは高かったといった

意見や、地理的・時間的制約が少ないといった積極的な評価もみられた。また、18大学(高専含む)のうち、17大学が「オンライン化はやむを得なかった」と回答し、大学からも、実務に近い内容の実習がオンラインで提供された、といった評価がみられた。

学生からの評価については、ざっくばらんなコミュニケーションを行う機会を設けるなど、オンライン実習に対する学生の不安を解消する工夫や、海外に赴任している社員の話を聞く機会を設けるなど、オンラインの強みを活かす取り組みが評価された。一方で、企業・大学・学生の全てから、対面によるコミュニケーションや、現場に赴き雰囲気などを含めて体験することの重要性について、多くの指摘があった。

オンライン実習と対面実習の比較

	オンライン実習	対面実習
時間と場所の制約	◎同時双方向型は場所を選ばない。オンデマンド型は場所に加え、時間も選ばない	△受講生は1カ所に集合する必要があり、時間と場所の制約を受ける
実習内容	◎実習運営における時間管理が容易 ○デジタル教材の活用による学習の効率化、高度化が図れる △PC上での作業またはキット送付が可能な範囲内ではしか実習ができない △臨場感に乏しく集中力の持続が難しい △秘密保持が難しい	◎社内の施設・設備をフルに活用した実習や実地見学が可能 ◎五感に訴えかける臨場感ある学習が可能 ○「意外性との遭遇」が期待できる ○秘密保持に関する対策を講じることが比較的容易 ○対面型においてもデジタル教材の活用は可能
その他の効果	○リモートワークなど新しい働き方を体験できる	○通勤や職場での交流など「社会人生活」を体験できる

凡例)◎:特に優れている。○:優れている。△:劣っている。 出典)オンライン実習教育価値向上プロジェクト報告書 図表2(p.6)

オンライン実習による対面実習の代替可能性

グループワークや実習先担当者との個別面談などはオンラインによる実施も有効

オンライン実習と対面実習には、相互に優れた点が存在する(6ページ下表参照)ため、それらを基にオンライン実習による対面実習の代替可能性について整理した。

オンライン実習のうち同時双方向型は、実習開始前の企業担当者との個別面談、実習生相互の顔合わせ、グループワークや、プレゼンテーションなどでの代替が可能である。また、オンデマンド型は座学講座、反復学習型知識定着プログラムなどに活用できる。

一方、工場見学、販売同行、店頭・現場実習、工場・ラボ内設置の機械設備などの操作実技、また、知識だけでなく行動や対応を確認するロールプレイや演習などは、オンラインによる代替は難しい。

企業・大学への期待

オンライン実習はアフターコロナ期を見据えた学習成果向上策としても位置付けられる

2021年度はウィズコロナ期における実習となり、プログラムの一部または全部のオンライン化は避けられない。さらに、アフターコロナ期においても、リモートワークやオンライン授業の定着などの変化は不可逆的なものと予想され、従前の実習にそのまま回帰することは現実的でない。

このような認識の下、オンライン実習をウィズコロナ期における非常時対応ではなく、アフターコロナ期を見据えた学習成果向上策として位置付け、新たなインターンシップのあり方として一体的に議論した。特に、ウィズコロナ期においては実習の各要素を「モジュール」として捉え、企業・大学間の合意の上で、感染拡大状況に応じて対面型とオンライン型の比率や有無を変更できるようにする柔軟な制度設計を行うことも有効である。

これらを踏まえ、企業には感染防止に最大限留意しつつ学生の学習機会を確保することを期待したい。また、オンラインを積極的に活用した実習効果の最大化や、その弱みの補完策について検討が必要で、とりわけ感染収束後は、対面型が強みを発揮する実習内容とオンライン型を一層効果的に使い分けるなどの対応も期待したい。

大学には感染防止対策と健康管理を徹底するとともに、学生の実習参加環境の確保に配慮することが求められる。参加学生に対するPCやインターネット環境の提供や秘密保

持と情報漏えい防止に関する事前研修の実施、さらには単位認定もオンライン実習の特性に見合った柔軟な対応を望みたい。

**対面型の代替手段だけと捉えず
オンライン実習の積極的な活用を**

企業や大学には、オンライン実習の強みを最大限に活かし、対面型の代替手段としてだけではなく、教育価値向上のためのツールとして積極的に活用することを期待したい。

対面型ならではの強みを有する面については、従来の実習形式を維持・改善しながら、オンライン型との適切な組み合わせがなされることが望ましい。組み合わせについては、実習の目的・内容や、受け入れ企業の業種・業態・職種によってさまざまであり、個別の事情に応じて最適な方法が選択されるべきである。

一連の検討を通じて共有できたことは、いかなる事態においても、「望ましい産学連携による教育効果の高いインターンシップの実現」を念頭に、学生の成長支援の取り組みを絶やさない、ということである。

コロナ禍という非常事態にあっても次世代を担う人材育成の重要性は不変である。企業と大学などは、この大きな目的のために互いの立場を尊重しつつ、教育効果の高い実習プログラムを共に作り上げて、学生の成長を支えていくことを期待したい。

■プロジェクト委員 (2020年12月3日現在:敬称略)

【企業】	
岩崎 晃洋	野村證券 人事戦略部採用グループ ヴァイス・プレジデント
薄井 光	花王 人財開発部門 智創部長
尾上さやか	東日本旅客鉄道 人財戦略部 マネージャー
長屋 晶子	第一生命保険 人事部 人事統括課長
深水 聡	コニカミノルタ 人事部 人財採用グループ キャリア採用担当マネージャー
山内 一将	第一生命保険 人事部 人事統括課採用グループ アシスタントマネージャー
【大学】	
猪股 歳之	東北大学 高度教養教育・学生支援機構 准教授 キャリア支援センター 副センター長
大津 晶	小樽商科大学 商学部 社会情報学科 教授
亀野 淳	北海道大学 高等教育推進機構 准教授 キャリアセンター 副センター長
高木 航平	上智大学 グローバル教育センター グローバル教育推進室 チームリーダー
高澤陽二郎	新潟大学 教育・学生支援機構 教育プログラム支援センター 助教
【経済同友会インターンシップ推進協会】	
藤巻 正志	専務理事・事務局長

初のオンライン実習について報告会を開催

経済同友会インターンシップ推進協会は、新型コロナウイルス感染拡大による社会経済の混乱という厳しい状況の中、2020年度の「経済同友会インターンシップ」を初めて完全オンラインにより実施した。

12月3日に開催された報告会から、オンライン化の経緯と意義、参加した企業と学生の報告を紹介する。

開会挨拶

学生の学びを止めてはならない

横尾 敬介

経済同友会
インターンシップ推進協会
代表理事



当協会は経済同友会会員が所属する企業と全国の大学・高専をつないで、望ましい産学連携の下で教育効果の高いインターンシップを実施することを主たる目的として活動している。現在正会員として企業25社、17大学・国立高等専門学校機構、準会員2社1大学、賛助会員として日本学生支援機構に入会いただいている。

2020年度は、コロナ禍という未曾有の事態の中、「学生の学びを止めてはならない」という観点から、初の完全オンラインによるインターンシップを実施した。企業において採用活動のWEB化が、また、大学においてはオンライン授業の実施が進んでいるところであるが、教育目的のインターンシップをオンラインで実施した例はあまりなく、ウィズ/アフターコロナ期の望ましい産学連携教育を考える上で貴重な経験となった。2020年度は、16大学、2高専の学生59人が、10社の企業でオンラインでのインターンシップを体験したので、本日はその成果を報告する。

オンライン化の経緯と来年度の展望

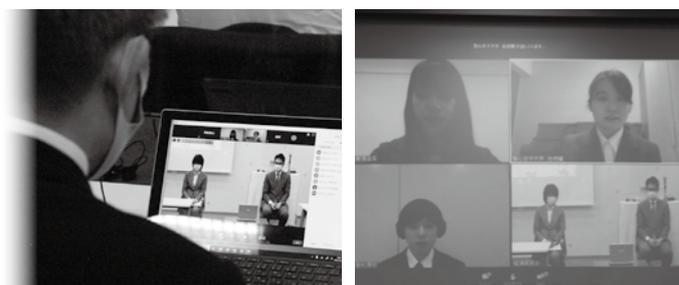
～望ましい産学連携による教育効果の高いインターンシップを実現するために～

藤巻 正志

専務理事・事務局長



2020年度当初の当協会の課題は、東京オリンピック・パラリンピックの影響をいかに最小限に抑えてインターンシップを開催するかであった。東京オリ・パラは大学の夏休み



期間に開催されるが、特に9月のパラリンピック期間で重複が生じるため、原則4週間でを行う当協会のインターンシップを本年度は期間短縮を容認するなど、実施に向けて配慮を行った。その結果、2020年3月時点で会員企業24社に対して合計134人の学生の受け入れが実現した。

このような状況下で、さらに新型コロナ感染症に見舞われたことから、当協会は、感染拡大に伴い、やむなくこの134人の対面実習を中止するとともに、オンライン実習への転換を依頼した。会員企業10社から賛同があり、16大学2高専から合計59人の学生がオンライン実習を体験することができた。

教育目的のインターンシップをオンラインで行うという貴重な経験が得られた一方で、やむを得ない事情からオンライン実習への転換が難しく、学びの機会が得られなかった学生も存在したが、コロナ禍においても学生の学びを止めないという当協会の目標は、一定程度は達成することができたと考えている。

2021年度に向けた課題は、ウィズ・コロナ期において、延期された東京オリンピック・パラリンピックへの対応も必要になる中、学生が実社会で学ぶ機会をいかに提供して成長支援を継続するかにある。そしてこのような困難な課題の克服に向けて、当協会は教育効果の高いオンライン実習をICTの力を活用することで実現したいと考えている。

このような経緯を経て、6～7ページに掲載したように当協会では「オンライン実習教育価値向上プロジェクト」を立ち上げ、今回の報告会において、当該プロジェクトのポイントをまとめた報告書を公表した。

企業事例報告

初のオンライン実施となったインターンシップについて、
会員企業を代表して2社の事例報告が行われた。

野村証券

人事戦略部採用グループ ヴァイス・プレジデント 岩崎 晃洋 氏



WEBツールはWebexを使用し 配布資料や事前課題の充実に努めた

今年度のインターンシップ期間はコロナ禍のため、10日間に短縮してオンラインでの開催となった。当初は社内的に対応が難しいかもしれないという声もあったが、結果的には無事に終了できた。

特にコロナ環境への対応ということで、以下の4点を実施した。1点目はWEBツールの活用。当時学生の間ではZoomが広く使われていたが、われわれはそれを使用できない環境であったため、別のツールであるWebexを使用することにした。学生にとって慣れないシステムであり、アプリのダウンロードから使用法まで事前に情報を共有して念入りに準備を行った。2点目はスケジュールの変更。プログラムを10日間に短縮して行ったが、単位取得の案件をクリアすることができた。また、事前資料などの準備には各部署に注力してもらった。3点目は、例年対面でのイベント参加時には当社のネット環境を活用し企業情報を検索してもらっていたが、それが困難となった。そのため、課題図書を事前に指定するなど、配布資料や事前課題の充実に努めた。4点目は対面での実習をカバーするという観点か

ら、社内の人間のやりとりや空気感を体感してもらえるように、座談会や複数人のプログラムを入れる工夫を行った。

実際のワーク内容は、前半はエクイティ・リサーチ部のプログラムを実施した。10人の学生を受け入れ、3～4人を1チームとして計3チームで、東証一部上場の同業種の企業を2社選んで比較分析する作業を3日間行った。その上で最終日にはプレゼンテーションを行った。後半のワークでは、投資情報部のプログラムを実施した。昨年度までのプログラムと比較しても、最終発表の内容は質の高いものになった。われわれにとっても、初のオンラインという貴重な経験であった。

オンライン開催ではあるものの 対面と遜色ないプログラムを意識

今回のプログラムは、対面でのインターンシップと遜色ないプログラムになるように意識した。そのため、毎日、全員メインルームに集まり、コンプライアンス研修、資産形成について、ボトムアップ・アプローチ、配当割引モデル、トップダウン・アプローチ、株式投資の基礎、デザイン講習、プレゼン講習などを行った。グループワークでは各ルームで共同作業し、分からないことがあれば随時メンターに相談できる体制を整えた。また、ランチタイムや若手社員とのQ&Aセッションなど、フランクに話ができる環境を用意するとともに、社員1人対学生複数人だけでなく、社員間のやりとりや社内の雰囲気を見てもらうために、社員複数人と学生複数人が対応する形も採用した。

オンラインでは休憩も大事であり、プログラムの長さに応じて、1時間に一回程度の休憩を適宜とるように心掛けた。画面越しの対話では学生の理解度が把握しにくいことから、一方的に話しがちになってしまうが、理解度を確かめながら進めたところよりスムーズな運営につながった。

毎日、全員メインルームに集まり、日本経済新聞の読み合わせからスタート



【研修中、全体で行った講義例】

- ・コンプライアンス研修
- ・資産形成について
- ・ボトムアップ・アプローチ
- ・配当割引モデル
- ・トップダウン・アプローチ
- ・株式投資の基礎
- ・デザイン講習
- ・プレゼン講習

グループワークでは各ルームで共同作業



わからないことがあれば随時メンターに相談

ランチタイム、若手社員とのQ&Aセッション等、フランクに話ができる環境を用意



社員1人対学生複数人だけでなく、リアルで失われてしまう社員間のやりとりや社内の雰囲気を見てもらうために社員複数人:学生複数人に対応

東日本旅客鉄道

人財戦略部 マネージャー 尾上 さやか 氏



経済同友会インターンシップの実施目的は 自己成長、キャリア形成、事業理解

当社では独自に夏季にインターンシップを行っており、コロナ禍の2020年も9月7日から18日にかけて、オンラインとリアルの併用で実施した。技術系については今年から試行的に1カ月間の長期インターンシップも実施した。

一方、経済同友会インターンシップについては、全面オンラインという形になったため、実習期間を9月9日～11日の3日間に短縮の上実施した。学生は自宅などから接続し、社員は通常の職場またはテレワークにて行うこととした。実施にあたっては事前課題として、会社概要や中期経営ビジョン「変革2027」を読み、当社のアウトラインを把握した上で参加をお願いした。

昨年は土木、建築、電気の3分野で学生を受け入れたが、今年はそれに加えて車両の分野を加え、4分野で5人の学生がインターンシップに臨んだ。短い期間であったが、車両、鉄道土木、橋上駅舎、踏切、信号機などの鉄道システムの基本を学んで、成果を発表した。

報告会で学んだ内容や将来の夢を発表 学生や社員と意見交換をしながら成果を確認

プログラムでは、まず全体オリエンテーションで会社概要説明、学生自己紹介、座談会などを行った。その後に車

両、土木、建築、電気の分野別講義で深掘りした業務内容の説明を行い、さらに社員から、生の声を伝える機会として今まで担当した仕事、やりがいなどの紹介をした。その後には各分野別に担当者と密に連絡を取りながら、レポートを作成してもらい、最終日にその報告会を行った。学んだ分野の業務や鉄道技術の特徴に加え、インターンシップを通じての学びや将来の夢などについても報告してもらい、学生同士や携わった社員と意見交換をしながら成果を確認した。

例えば橋上駅舎の設計では、ポイ捨てや各種いたずら、器物破損につながり得る場所となってしまうため無駄な空きスペースは作らないとか、ホームは雨水を線路の方に流すための傾斜がついているので、エレベーターの向きはホームと平行に造るといったことを学んだ。一見当たり前のようにある施設の配置が、さまざまな理由によってそうなっていることを理解していただいた。

場所や地域の垣根を越えた社員との交流も オンラインツールを活用して実施したい

3日間という限られた時間ではあったが、参加者から、「鉄道業界についてより詳しく知ることができた。インターンシップ参加前に比べ、鉄道業界で働きたいという気持ちが一層強くなった」「鉄道を運行するにはある一分野の知識だけでなく、さまざまな分野の知識が必要であるということが理解できた」といった声が寄せられた。

一方、受け入れ側の声としては、「全てオンライン実施にするのは初めてのことで、カリキュラムは手探りではあった。しかし、最終日のレポート報告会では想定していたより高いクオリティのレポート発表をしていただいた」といった声が上がった。来年度は、多様な事業フィールドにおけるキャリアや業務の幅広さ、社員一人ひとりの挑戦の重要性を感じていただくため、開催場所・地域の垣根を越えた社員との交流も、オンラインツールを活用して実施したい。

受け入れ学生・取り組んだテーマ

系統	学校	学部・学科	学年	課題テーマ
車両	新潟大学	工学部 力学分野	1年	鉄道車両について
土木	北海道大学	工学部 環境社会工学科	2年	鉄道土木の未来の姿を考えよう
建築	埼玉大学	工学部 社会環境デザイン学科	1年	橋上駅舎を設計してみよう
電気	岩手県立大学	ソフトウェア 情報学部	2年	踏切の制御の仕組み
	九州大学	工学部 電気情報工学科	2年	信号機の色が変わる仕組み

インターンシップ実習生の体験報告(要旨)

企業報告に続いて、参加した学生3人が
オンラインによる活動報告を行った。



若杉 淳紀さん

東北大学
経済学部2年
実習先：三井不動産

自己分析と必要な能力を得ることの重要性を知った

新型コロナウイルス感染症拡大の影響で、将来に不安を抱いていた中、今後どうい活動をしていくべきかを見極めたく、インターンシップに参加した。

実習はオンラインで10日間、学生4人グループで、グループ4社を回って行った。不動産業界の構造と不動産の種類によって変わる視点の重要性、仕事全般に必要なスキルを学んだ。私はメンバーと役割分担し、リーダーや発表担当を務め積極的に発言することができた。

地方で暮らす私には、実習で扱った施設や東京という都市がイメージしづかった。オンラインでは複数の人が同時に話すため、議論が停滞しがちになることもあったが、さまざまなワークや講義を通して生でしか分からないことを学ぶことができ、インターンシップを今体験できて大変良かったと思う。自分の得意・不得意がある程度まで理解でき、必要な能力を知ることができた。この経験を活かして自己分析を深め、専門知識や能力を身に付けていきたい。



佐居 瞳さん

聖心女子大学
現代教養学部2年
実習先：三井不動産

自分自身の変化を実感。より視野を広げる挑戦へ

実習を通して、社会をけん引する企業として長く存在するために大切なこと、企業経営と求められる人材、俯瞰して広範に物事を捉え、企画や分析をしながら考えをまとめていくことの重要性、歴史を理解する意味などを考えた。また、課題に対して私たちは新しい視点で提案したつもりだったが、周囲の納得を得て進めていくことがいかに難しいかを実感した。アイデアを理論立てて実現に近づけていく達成感を味わうことができた。

こうした経験の後、自分自身に変化があった。自分の意見を明確に持って他者を巻き込み、ディスカッションやグループワークに積極的に参加すること、日常生活やアルバイトでも自分を振り返り、他人からのフィードバックを徹底するようにしたことだ。今後は学外でも経験を積むことが必要と感じ、英語でプレゼンテーションするビジネスコンテストに挑戦しようと決めた。自身の将来の可能性を狭めないことを意識して、さらに視野を広げていきたい。



賀陽 遥菜さん

埼玉大学
経済学部2年
実習先：花王

社員の方々の入念で丁寧な対応に学んだ

花王のサステナビリティ活動に興味があった。私は国際協力団体でフィリピンの自立支援に携わっていることもあり、花王の製品がどのように豊かな生活文化を実現しているのかを学びたかった。ESG活動のグループワークでは、自身のアルバイト経験から提案した。短い時間で結論を出すことは難しいが、社員の方々や他大学の学生との交流を通して、さまざまな刺激を受けた。

花王のバリューの一つ「よきモノづくり」に共感し、より良くできること、もっと努

力が必要などころはないかと振り返る習慣ができた。オンラインでは自ら進んで参加し、発言することが重要なので、日頃から積極的なコミュニケーションを心掛けるようになった。

企業が大切にしている価値と自分の進みたい方向をマッチングしていくことが重要だと感じた。オンラインでも社員の方々が入念に密度の濃い内容を準備され、丁寧なアドバイスをいただいた。私も心遣いや準備を大切にしていきたいと思う。

意見交換(抜粋要旨)

報告会后、会場およびオンライン参加者からも質問や意見を受け付け、事例報告を行った2社と学生が質問に答えた。今回取り組んだオンラインインターンシップのメリット・デメリットを踏まえ、今後の経済同友会インターンシップのあり方を考える場となった。

Q 野村證券では、学生が対象企業に電話で調査を行ったとの報告があった。学生にとっては貴重な経験になったと推察するが、その際、配慮した点をご教示いただきたい。

A 実際のアナリスト業務において、現場の社員がサポートしながら学生自身が対応したと聞いている。相手企業様にインターンシップであることをしっかり説明するように指導した。(岩崎氏)

Q 参加した学生の皆さんはインターンシップ前後でどんな変化があったか。また、印象に残った社員の言葉は何か。

A 今まで以上に経済に対する知識を蓄える必要があるという意識が高まった。挑戦するエネルギーにもつながった。印象に残った言葉は「仕事に対して自分が楽しめるかどうか」。どの企業の方も仕事に対して楽しんで取り組んでいらっしやると感じた。(若杉さん)

A 自分の意見を発表する、意見をまとめるといったことができなかった。それができるよう自分を改善するために学外の取り組みにも参加していきたい。私たちの身の回りにあふれている当たり前は誰かが作ってきたもので、自分がそういうことに携われると考えたことがなかった。「今の当たり前を作ってきた」という言葉を受けて、まちづくりなどの実習に取り組んだ。アイデアを実現に近づけていく体験からイノベーションを感じた。(佐居さん)

A 準備や心遣いが大切だと再認識した。日々忙しい中でも人に対して気遣いし、できることがあれば準備していくと思ったのが一番の成長だ。社員の方には「社会人になってからも成長できることがたくさんある」と教えていただいた。常に学ぶ姿勢が大切と思った。(賀陽さん)

Q JR東日本では、多様な価値観に触れられるような実習内容となっている。その多様性には表面的なものと考え方など内面的なものがある。参加学生はそういう意図をくみ取ることができたか。

A 一つの仕事をやる際、いろいろな部署との連携が必要だが、今回のオンラインではその連携を披露できず、またそういったプロジェクトに携わっていただけなかった。私どものプログラムで足りなかった部分だと思う。弊社はこれから鉄道以外の分野にも注力するので、来年度



はさまざまな可能性を秘めている企業であることをもっと感じていただけるようなプログラムにしたい。(尾上氏)

Q オンラインのプログラムだからこそ対面のプログラムよりも気付きやすい学生の行動特性や能力、特徴などはあったか。今後ハイブリッドのプログラムを検討する際に参考にさせていただきたい。

A オンラインでは相手に伝えやすくするために言語化する能力が必要だ。今回参加した学生についてはその能力が非常に高かった。現代の学生は慣れているのではないかと。また、例年に比較してもパワーポイントを使ったプレゼンテーション能力が非常に高かった。(岩崎氏)

A 話すことが不得手な学生の場合、画面越しでのコミュニケーションではどうしても空気感が伝わりにくい。やはり積極性がないと十分に学習効果が上がらないと思う。逆に、むしろオンラインの方が話しやすいという学生もおり、そこを企業側がどのようにくみ取ってフォローするのか難しさも感じている。(尾上氏)

Q 学生の皆さんは後輩たちにインターンシップの参加を勧めるか。どのような学生に勧めるか。また、その理由は。

A 経済同友会インターンシップは1、2年生から参加できる。私が仙台という地方都市に暮らしていて、東京という場所に関わることができ、さまざまな価値観を得たという点でもとても良い機会だと思う。特に東京など大都市に就職したいと考えている学生には勧めたい。(若杉さん)

A 将来ビジョンや何がしたいのかが明確にできていない人は参加すると思う。2年生という早い時期から参加できる機会はなかなかないし、素晴らしい企業が参加しているので、自身を考える機会になる。(佐居さん)

A 普段関わることのないさまざまな方と議論できて、新しい発見があると思う。私は埼玉に住んでいるため地方の人と接する機会がなかなかなかったが、今回他大学の皆さんと同じ時間を過ごすことができて良かった。(賀陽さん)